

佐賀通

TORU SAGA

斗瑛柊
に
関する
こと ∞

DEUX OU TROIS
CHOSSES
QUE JE SAIS
DE LUI:
EIGHT HIIRAGI



A KAGEFUMI
SCIENCE FICTION SERIES

|A KAGEFUMI SCIENCE FICTION SERIES|

柊瑛斗に関すること

佐賀通

DEUX OU TROIS CHOSES
QUE JE SAIS DE LUI: EIGHT HIRAGI

by
Toru SAGA 2016

cover illustration
by
Masaki TSU

cover design and art direction
by
Matthew A. KEITH
(t. m. production)

柊瑛斗に関すること

「——レベル〃8（エイト）〃開放——」

終瑛斗はそう呟くと、僕の隣から忽然と姿を消した。彼のいたところにポスン、と彼自身がかけていたシヨルダーバッグが落ちる。

『能力者』というやつらしい。よくは知らないが。彼が呟いたあの言葉は、彼自身が能力を発動させるためのいわゆる呪文というか言霊というかそんなやつらしく、レベル〃8（エイト）だからといって別に1から7があるというわけではないらしい。

それにしたってわざわざ〃8（エイト）〃と言うのは恥ずかしくないか？ と聞いてみたところ、

「いいんだよ、〃8（エイト）〃は〃速さ〃の象徴なんだから」

とはにかみながら彼は答えた。

彼がこうやって僕の隣だったり前だったり後ろだったり上だったり下だったりから姿を消すのはそう珍しいことではないのだが、考えてみれば僕は彼自身の能力を知らない。

「速さ」の象徴」と彼は言った。普通に考えてみれば彼の能力は速く動ける、という過去様々な人々が持つてきたごく普通の能力なのかもしれないが、結局のところ本当にその能力であるかどうかの確証はないのだ。もしかしたら何か別の能力のミスリードなのかもしれない。

さらにいえば、「何のために能力を使うのか」も僕は知らないのだ。彼の能力者としての使命なんていうのは僕が知っても意味のないことなのかもしれないが、古今東西、様々なヒーローやヒロインのそばにいる何の変哲もない人間がそのヒーローやヒロイン達と一緒に戦おうとする様は憧れるものがあるし、僕自身すくなくならず彼の力になればいいとは思っている。けれども彼が何か能力について悩んでいる様子を見たこともなければ、帰ってきた時に怪我をしていたということもないので、今のところ力になる予定もなければ能力を知ってアドバイスをあげるような予定もない。

終瑛斗曰く、能力者だからといって大いなる責任が絶対に伴うわけでもないし、与えられた能力に悩んだりすることも絶対ではないらしい。彼がそう言ったのだということを考えるると、彼自身が何か大きな敵と戦っているなどというような、地球の平和をその一身に受けて

いるような状況ではないようだ。

そんな終瑛斗が生まれて初めて負けて帰ってきたのがつい2日前ということになる。もちろん僕は彼が何に負けて帰ってきたのか知らないし、そして今回も特に何か傷を負って帰ってきたというわけでもない。ただひと言、僕に「負けた」と報告しただけだ。

その後、彼がどうなったかという特にどうなったというわけでもない。まだ2日しか経ってないということもあるけれども、彼が僕の右なり左なり上なり下なりから突然消えるといったことは起きておらず、別にそれも特別なことでもないのです、今のところ彼は平常運転だと思われる。

彼に何に、どうやって、どのように負けたのか聞いてみたところ、彼は意外にもあっさりと答えてくれた。

「木の根っこのような足が10本で、タコのような腕が8本、胴体は黄色でくちばしは赤く、尻尾は象みたいな感じで先端には針が付いていて、肩にあるガトリングから酸を出すような奴から念力をくらって負けた」

負けたあとは？ と聞くと仲間が直後に駆けつけてきて、すぐにその敵を倒してくれたのだそうだ。これで彼にも仲間がいることがわかった。あと彼が普段何と戦っていたのかもわかった。彼は続けて話してくれた。

「あと1歩で勝てるどころだった。油断していたのは相手の方だったし、間違ひなくあと1発自分がぶち込んでいれば相手を倒せるはずだった」

話してくれたのはいいのだが、僕は彼が相手にどのようにダメージを与えているのかもわからない。パンチかキックを相手に食らわせるのか。何か飛び道具でもって相手にダメージを与えるのか。なぜか彼はこの質問には頑として答えようとしなかった。ここまできてわざわざ隠すようなことなのか。いくら聞いても最後まで答えてくれなかったので、僕は彼の攻撃方法を知ることができなかった。負けてしまったことに対してはどのように感じているのか、そのことも聞いてみた。これにも彼はあっさり答えてくれた。

「テストで悪い点取るほうがよっぽど悔しい」

それにしても彼は全然負けたあとのような感じが全然ない。先程もいったように特段傷を負っているわけでもなさそうだし、そして負けたからといって何か落ち込んでいる様子もない。

つまるところ、そんなに執着はないのだと思う。彼が立ち向かうべき敵は別に彼でなくて、も倒せる相手だし、彼がその能力をもってして倒せない相手が出てきたのなら、彼ではない別の誰かに頼めばいい。彼自身負けたところで彼がピンピンしている様子を見ると別に命に関わる危険があるわけでもないらしい。

そして負けたからといって次に負けないために何か努力をするわけでもない。

「別にヒーローってわけじゃないからな」

柊瑛斗はさらりとそんなことを言う。その割には自分の能力の発動はバッチリとヒーローっぽく決めているので、そのことをからかおうと思うのだが、彼自身、あの台詞は別にヒーローだろうがそうじゃなからうが台詞を決めなければならぬ以上、普通で済ませるわけにはいけないものであると思っっているため、別段恥ずかしくなるようなことではないらしい。きっと柊瑛斗はこれからも能力を使い続けるのだろうなど、この時僕は思った。

柊瑛斗が戦闘を行う場所についてもよくわかっていない。柊瑛斗が戦っている、立ち向かっている相手がそんなに変な格好をしたやつなのだというのなら、僕自身いろんな風の噂でその変なやつが現われた情報をどっかで聞いているはずだし、一度も聞いたことがないというのなら、もしかしてその敵というやつは僕らには見えぬ、その能力者のみ、姿が見えるということなのかもしれない。姿が見えない敵に人知れず戦う。さらになんかヒーロー感が僕の中で増してきた気がするのだけれども、これも彼から、

「敵の姿が見えないわけがない。きちんと誰にだって見える相手だ。一般の人に見えず、僕たちにしか見えないなんて、それはちよつと怖すぎる」

と回答をもらったので、どうやらそんな特殊な条件下で戦っているわけではないのもここ

でわかった。

どうあがこうと僕が彼の力になれそうにもないのは明白で、少しづつ彼の能力やその周辺
の状況なんかを知ろうとし始めた最近の僕の好奇心みたいなものについて、

「なんかえらく気になってきているみたいだけど、能力者として日々を過ごすというのはそ
んな格好いいものじゃない、知っても別にほかの人たちに自慢できるほどのすごい戦いを僕
がしているわけでもないし、僕が戦っている様子を見ても、『なんだ、こんなものか』とし
か思わないはずだ」

と柊瑛斗は僕に言うのだった。

なんだかえらく突っぱねられているような気もするけれど、僕としてはこのまま能力者と
しての柊瑛斗のことを全く知らないまま過ごすことは多分可能はずで、そして日常を彼と
ずっと変わらないまま過ごしていくのだろうなということもなんとなく想像できる。さらに
僕は柊瑛斗とその彼が持つ能力、そしてその敵とか彼の協力者のことについてすごく知りた
いかというとは実はそれがそうでもない。

彼がこのままずっと教えてくれないければ僕としては、それはそれでいいし、このまま日常
を続けていけばいいだけだ。僕としてはそのはずだった。

名前は高梨椿子というらしい。僕の目の前に現れた彼女は一体何なのかというと、どうやら彼と同じ能力者であるようだ。彼女から呼び出された理由は、「柊瑛斗に能力者とは何たるか」を教えて欲しいということだった。

僕が柊瑛斗に能力者とは何たるかを教えるなんていうのはおかしい話で、僕は能力を持つたこともないし、使ったこともない。何度も繰り返すが彼がどのように能力を使っているのかも知らないのだ。僕が彼に教えるべきことなど何も無いはずだ。

教えるべき内容はそうではないのだという。そうではないとは一体何だろう。能力の使い方？ 能力者としての心構え？ 違う。全部違うと彼女から言われた。

「能力者が能力者であるなら、そこには必ず能力者としての登場人物にならなければならぬ」ということだった。

「登場人物にならなければならぬとは？」と僕は最初に思う。これは誰でも思うはずだ。

柊瑛斗は敵を倒すための努力を行わないそうだ。それは大体予想がつく。というか既に知っている。彼自身、必死こいてこの世界を守っているわけでもないというのは彼自身言っていたことだし、僕としては彼がその能力を成長させていく過程を思い浮かべることがもはやできなくなっているのは確かに事実だ。

「それではダメなのよ」

彼女は言う。

「ある種の能力を持って生まれたのなら、きちんとその能力を持った登場人物として役目を果たすべきだわ。けれども現在、彼にはその登場人物としての自覚がない。これではダメよ。もはやただのモブじゃないの」

モブも悪くないんじゃないかな。多分柊瑛斗ならそう答えるだろうし、そして僕もそう思っている。

「もういいわ、とにかく頼んだから」

それだけ言うと彼女は僕の前から去っていった。

柊瑛斗はまた戦い始めた。ある日、僕の隣にいたはずの柊瑛斗が消え、僕は彼が再び戦いに行ったのだということを実感として捉える。どうやら彼は戦えるようだった。別にこれは驚くようじゃない。彼からすれば別に戦うということは日常なわけで、そこには負けたから戦うのをやめるという選択肢ははなからなく、特に考慮されるべき事案ではなかったはずだ。

立派に戦っているようじゃないか、僕は高梨椿子にそう伝える。

「私からあなたには、何も伝わっていないようね」

高梨椿子は僕にそう返す。無表情な彼女。何も言い返さない僕。そもそも僕は彼女の前回

の提案に対して肯定の返事をした覚えもないし、理解したなんて返事もしていないはずだ。だからといってここから特に押し問答をする気は僕にはないし、彼女も僕にさらに強く主張を行うといったことはしない。本当に彼女は、僕が柊瑛斗へ「能力者とはなんたるか」を教えて欲しいのだろうか。彼女だって僕に何かできるとは全く思っていないし、期待もしていないのではないだろうか？

高梨椿子からすれば、能力を持ったからには大きな責任が伴うはずで、その大きな責任とこの人はすべからず能力者である以上、ただの一般人同様モブのような存在でいいわけがなく、登場人物としてのひとつ上の品格と行動が伴わなければならないというものだった。

そこまで何か登場人物にならなければならないものなのだろうか？

能力者というものがたくさんいるのなら、別に描かれることはない能力者だってこの世にいるはずだ。別にそれが柊瑛斗であったとしても柊瑛斗自身特に何も感じないことであるのは事実だし、それならそれでいいじゃないかというのは僕も思い始めてきたところだ。

「誰も別に『能力を持ったからには大きな責任が伴うはずでその大きな責任というのとはすべからず登場人物でなければならない』なんてことは言っていないわ」

彼女からはそう返されてしまった。いや、そんなことを言ったのだと思うが。

なんだってそんなに柊瑛斗に注目するのだろうか。柊瑛斗がラスボスの息子だったとか、も

のすごい能力が潜在的に秘められていたのだとか、それこそ主人公的立ち位置にいるのだつたら、彼がなんか頑張らなければならぬのもわかる。でもやっぱり、彼は普通なのだ。いや、普通ではないのだけれども、普通の能力者なのだ。彼に入れ込む価値はそんなくないと思う。そして僕はそれを彼女に言ってみた。そして彼女は僕に答えを返してくれた。

「だって、私がヒロインになりたいんだもの」

なるほど、主人公というかメインの一部の登場人物の隣に居るべき存在がヒロインだと言われるべきものならば、彼女は柊瑛斗にその登場人物としての役割を持ってもらいたいということは、だいたい今までの流れはわかるような気がする。いや、やはりよくわからない。

なんで僕が彼女のために柊瑛斗を焚きつけなければいけないのか。そもそも僕と彼女は無関係であるし、別に僕からけしかけする必要などなく、彼女自身で頑張ればいいだけではないか。

「ヒロインから生まれる登場人物の覚醒なんてまっぴらよ。いつも隣にいるあなたの呼びかけ、またはピンチによって彼が表舞台へ上がってきてもらうほうが、自然な流れだと思わない？」

やはり、僕は彼女が何を言っているのかわからない。柊瑛斗自身のあのスタンスを変えることは僕には無理だ。彼自身のために行動をするのではなくて、今日の前にいる彼女のため

に柊瑛斗を変えさせなきゃいけないというのなら、僕はこの話には絶対に乗らない。

柊瑛斗に対して高梨椿子から聞いた話とか相談みたいなものをいろいろ省いて話してみたところ、

「なるほど、別にいいよ。なんか理由はわからないけど僕が頑張って登場人物としての何か
が持てるのなら、僕の持てる限界、限界以上の力を使って僕は能力者としての自覚を持つ能
力者になろうじゃないか」

と僕に向かってそう宣言した。

柊瑛斗はそれからというものの能力者であるための特訓をし始めた。能力者であるための特
訓なんて一体何をすればいいのか僕にはわからないが、どうやら日々、柊瑛斗はどこかで何
かしているらしく、その内容を僕には教えてくれない。あっさりとやる気を出し、頑張り始
めたのを見ると、別に僕の関わりなどというものは不要なのではないか、別に僕が言う必要
は特になかったのではないか、というのが今のところの僕の思いだ。

ところが柊瑛斗に言わせるとそれがそうでもないらしい。どうやら僕の存在というのは本
当に柊瑛斗にとって能力者であることを自覚させるために十分な要因となるらしく、かと
いつてなぜそんな要因になれるのかは、柊瑛斗は僕に話してくれないのだった。

高梨椿子からは柊瑛斗が特訓し始めたことを知った瞬間、「ほらね」と言わんばかりの顔をしてきたし、僕としてはなんか負けたような気になって釈然としない。

「ならば、彼に頑張らないままできて欲しかった？」

彼女からはそんなことを聞かれる。そう聞かれれば頑張ってもらうことに当然否定などするはずもないのだけれど、それでも頑張ることはないというスタンスを持っているようだった。柊瑛斗に対して、それならそれでいいかと一旦は思っていた身だ。別にあのまま頑張らなくてもそれはそれで構わないということは、僕は確かに思っていた。

柊瑛斗はどうやら強くなっているらしい。

直接彼の戦いなど見たこともないから強くなったかなんてわからない。もちろん、普段の生活を見たところで、強くなったどうかなんてわかるはずもない。それでも彼は強くなったのだという。

強くなった、ということではひとまずは目標達成ということでもいいのだろうか？ と僕は高梨椿子に尋ねてみた。

「そうね、目標は達成できたんじゃないかしら？」

あっさりと彼女はそれを認めた。

これで僕はもうすることはないのだけれど、いや、そもそも何もやっていないのだけれど、僕の役目は終わったということでもいいんだろうか？ あとは高梨椿子自身に今後頑張ってもらえばきつとそれでいいんだろう。ヒロインへの道を後は適当に頑張っていただけでいい。

能力者たるもの、戦いが進むにつれ「未知なる敵」が目の前に出てくるらしい。よくはわからないのだがきつとその敵が出てくる度に能力者達も自分自身の力がさらに強くなっているものなのだろう。

そして、柊瑛斗の前にもその敵が出てきたらしい。柊瑛斗が初めて負けた敵はその「未知なる敵」とは違うのか？ と僕は思い、実際、彼に聞いてみたところ、

「あの敵は『未知なる敵』とは違う。『未知なる敵』とはそれこそ姿かたちも、出身も攻撃方法も、戦わなければならない理由も何もかもが違う。いや、戦う理由は根本的には同じか、みんなの平和のために戦う」

柊瑛斗は一人でふんふんと頷くと、そのまま僕の前から姿を消した。彼はどうやらまた戦いに行ったらしい。

「柊瑛斗の『未知なる敵』はどうやら今までの柊瑛斗の1段階上の能力を持った相手みたいだね」僕は高梨椿子からそう教えられる。そもそも「未知なる敵」というのはそういうものじゃ

ないのだろうか？　今まで戦ってきた相手とは違う相手、そして今までの敵よりも何段階も強い相手というのが「未知なる敵」にあたるものではないだろうか？

『未知なる敵』が弱い場合だってあるわよ」

高梨椿子からそう返される。僕としては、それはあまり盛り上がらない展開だ。高梨椿子なんかはまさしくそうだったらしく、未知なる敵が現れたからといって、実は今より強い敵だったというわけでもなく、能力だってそんなに上がることはなかったということだった。というか全く上がらなかったそうさ。

けれども今回の柊瑛斗の件に関して、相手は1段階上の力の持ち主らしいし、それならそれで柊瑛斗もまたひとつ能力者としてのランクが上がるのではないだろうか？

結果からいうと、柊瑛斗は敵を倒した、しかも圧勝で、それも自然に。やられそうになったから新たな力が発動したとかそういうことではないらしく、今までの戦いぶりとは全然違う動きを見せ、その場にいた敵を瞬殺したらしい。柊瑛斗は努力の結果、いつのまにか、今までの柊瑛斗よりも何段階も強くなっていることがわかった。

「あそこまで強くなっているとは思わなかったわ」

高梨椿子は僕にそう言った。どれぐらい強くなっていたかなんてことは僕だけじゃなく、周りみんながわかっていなかったらしい。それもそれでなんだか柊瑛斗らしい気もするし、

強くなったからといって、終瑛斗はそのことに関して相変わらず無頓着なようであるらしく、倒したからといって喜ぶわけでもなく倒したらすぐにそのまま帰っていったらしい。

強くなったにはなった。けれども心構えみたいなのはどうやらずっと変わっていないみたいだ。

「予定とは違うわね」

高梨椿子曰く、予定とは違うらしい。

「具体的にどうとは言わないけれど、強くなりすぎじゃないのかしら？」

そこには具体的にどうという要素はあるのだろうか。僕にはよくわからないのだが、強くなりすぎるとよくないことでもあるのだろうか？

「もちろん、よくないに決まっているわ。パワーバランスの崩壊があるじゃない。彼があんな風になってしまった以上、ここから先一体どうやって敵との苦戦の中で私のヒロインとしての役割を演じたらいいのよ」

それは僕に聞かれても困る。そのあとのことは彼女自身にゆだねたつもりなのだ。彼がどうしてそこまで強くなってしまったかはわからないが、僕としては彼が強くなったのならそれはそれでいいし、彼のスタンスがああいう感じである以上、彼はきつとあのまま敵を倒し続けるんじゃないかと思う。

なんだか感触としては何も変わっていない感じだ。ただ単にこれでは柊瑛斗がものすごく強くなっただけのような気もするし、そもそも元の強さも今現在の強さも僕はわかっていないのだ。

柊瑛斗に対して強くなった自分をどう思うかを聞いてみた。

「いや、強くなったなあ……、としか思えない。強さに対する義務云々は置いといてまあ、強くなったのは損でない気がするよ。何か恐ろしい戦いに巻き込まれているなら強くなったということは、その次の戦いに巻き込まれ続けなければいけないわけで、僕たちが巻き込まれているのは毎回言っているようにそこまで大それた戦いじゃない。強くなったから敵が倒しやすくなっただけで、別に僕にはそんな強くなった自分を見つめ直すようなことは特にする必要もないんじゃないかな」

と返されてしまった。やはり何も変わってない気がする。強くなるうと決めたのは柊瑛斗自身なのだから、やっぱり多少なりとも考えがあったとは思うのだが、強くなった途端、何か気が抜けたかのように前の彼に戻ったと考えていいのだろうか？

柊瑛斗が強くなってからというもの、彼を取り巻く状況が変わったかといえればこれがやはりそうでもないらしい。彼はいつも通り僕の前から消えるし、そして戻ってくる。

ある日、僕は敵に捕らえられた。捕らえられたというのはそのままの意味で、いや、そのままの意味かはわからないけれどもつまり、僕はある日の帰り道、襲われ、拉致され、どこか知らない場所に監禁された。どうして監禁されたのかといえばこれはやっぱり柊瑛斗絡みであるらしく、柊瑛斗を呼び出すための罠か何かであるらしく、つまるところ、柊瑛斗のピンチになるわけだ。

僕としては柊瑛斗の何か力になればと、協力したい気持ちでずっと過ごしていたのに、どうもうまくいかないようで、結局のところ、いささか不本意であるのだが、柊瑛斗の足でまといになるだけなのだった。

結果からいえば僕は助かった。

誰が助けてくれたのかといえばもちろん柊瑛斗で、助けてもらった最初の僕の一声は「ごめん」になるのだけれど、柊瑛斗はそんなこと全然気にする様子もなく、「いや、こちらは何も苦労してないし」

と返すだけだった。本当に柊瑛斗は苦労しなかつたらしく、あっさりとして僕がいる場所を突き止め、そしてあっさりと敵を倒してしまふ。そして僕はあっさりと助かったわけだ。

向こうがあまりにもひょうひょうとしていて僕としては柊瑛斗にとっては今回のことも特に取り立てて慌てるようなことでもないのかと思った。それならばそれでいいのかとも

思い僕はそのあとに続けて「まあ、それでも一応お礼だけでも……ありがとう……」と返しておくことにした。柊瑛斗からは、

「じゃあ一応どういたしまして、だけでも……」

と返答があった。

柊瑛斗からすれば今回の僕の救出というのはやっぱり本当に大したことではないらしく、今のところ柊瑛斗に抜け出せない状況が訪れることはないというか、全て結局うまくいくことになるほどの力を持っているということだった。

別にそれはピンチが訪れないとか、僕が敵に捕らわれないとか、高梨樺子がヒロインにならないとかそんなことではないらしく、どんな絶望的な状況に襲われようとも、柊瑛斗は一人でそれをひっくり返すことができるということだった。

「確かに、ヒロインになれる状況というわけではないよね」

高梨樺子は僕にそう言った。そんなに僕に何でも相談する必要はないと思うのだが、高梨樺子からすると結構こういうのは言わないといけないらしく、

「こんな状況で気持ちを自分の内に秘めたまま過ごすなんて、愚の骨頂のヒロインじゃない」というのが彼女の主張だった。

それこそ本人には全く接触せず、ずっと僕にこうやって報告し続けている方がヒロインと

して愚の骨頂なのではないだろうかと思うのだが、高梨椿子からすると、それは別にそうでもないらしい。

「それはそれでいいのよ」

高梨椿子はそう主張する。

「あなたとこうやって会話をするのも、これはこれで私がヒロインになるための戦略なんだから」

高梨椿子がそう言うのならきつとそうなんだろう。

そうだとしても、このままこの調子では高梨椿子はいつヒロインになれるのだろう。今のところ柊瑛斗から高梨椿子への評価なんてものは全然ないわけで、高梨椿子が一体何を狙って僕に接近してきて、そしてどうやって柊瑛斗の隣にいれるようなヒロインになるつもりなのだろう。それを彼女本人に尋ねると、随分気の長い計画を高梨椿子から聞かされる羽目になり、どうやら高梨椿子がヒロインになれるのは随分先のようにだった。それでも高梨椿子はヒロインを目指していくらしい。

高梨椿子からすれば、僕みたいな存在というのは邪魔に思ってしまうような存在じゃなかったのだろうかと思ったりもするのだが、これに対しては彼女曰く、別に僕みたいな存在は想定内の範囲であり、取り立てて追い出さなければならぬような存在ではないらしい。

まあ、彼女の僕に対する対応を見る限りではそんなに僕に対してぞんざいな対応をするわけではないし、それを考えたら彼女の言っていることは本当なんだろうなって思う。

柘瑛斗からすれば、僕が敵に捕らえられたという事実と、それを自分の力で解決できたという結果を踏まえたいえで、自分の力を強くしてきたことは間違いじゃなかったのだと、それなりに嬉しく思っているらしい。

これは僕の中では結構意外なことで、彼ならばあっさりと「まあ、こういうこともあるものなのだろう」と結論づけるものだとばかり思っていた。

「いや、それではまるで僕が人間味のないやつみたいに見えるじゃないか。そのまま考えたら、僕が君を救えなかったらそれもそれでいいか、と考える奴になってしまう。いくら自分の持つ能力や他の物に興味がなかったといっても、別にそこまで世間全てに興味がないやつみにに思われたらさすがに困る」

と柘瑛斗から言われてしまった。なんだかあんなにあっさりと助けてもらったのだから、助けることのできる力を持ったこと自体もあっさりと考えていたのかと思ったらそうでもないらしい。それならばやっぱり柘瑛斗自身、強くなろうと決めたこと自体、彼自身に大きな影響を与えたということなのだろうか。

「いや、別にそれぐらいは強くなろうと思う前から考えているとは思うけど……」

どうやら柊瑛斗からすれば、僕は柊瑛斗のことを完全に世界に興味がなさすぎるやつだと思いきなうのではないかと考えているらしく、そこまで人間味のないやつではないというのが彼の主張なのだった。

「つまるるところ、私としては」

と高梨椿子は話し始めると、

「柊瑛斗は確実に変わっていると思っているの」

と僕に宣言する。これまた僕に宣言したって仕方ないのだとは思うのだが、彼女から聞いた今後の計画のことを考えると、確かにここから彼女自身、本当に頑張っていかなければならないのだと思う。

彼女がこれからやっていくこととしてはその変化したらしい柊瑛斗に接触するところからだと彼女は言う。まあ、それはそうだろう。柊瑛斗に会わないことには、会って認識してもらわないことには、柊瑛斗の隣でヒロインをすることもできない。確かにすぐく今更なような気もするけど、彼女は会ったあとの対策なんかもできているみたいなので、それは彼女自身の裁量に任せるしかない。

まあ高梨椿子が柊瑛斗に会おうが会わまいが、どちらにしたところで結局高梨椿子はヒロ

インになることができず、終わっていくのだが、とにかく高梨椿子はここから頑張ることに
なる。

柘瑛斗は、はじめて高梨椿子に会う。だからといって何か話が進むわけでもない。

柘瑛斗の会った時の第一声は、

「はじめまして」

だったし、高梨椿子の第一声もまた「はじめまして」だった。まあ、随分普通だったとは思
思うし、そしてこの普通の出会いには普通の知り合いへと変化していく。

普通の知り合いへとなった高梨椿子は僕にある日こういった相談をする。

「彼はどうやったら私をヒロインにしてくれるのかしら」

今まで練ったらしい計画は何処へ行ったのだろうか。高梨椿子はそれこそ最初の原点にも
近い疑問に当たるといった。

質問内容としては真つ当のようなそうじゃないような気はするのだが、柘瑛斗の気を惹き
たいという問いに関してなら僕はただただそれは難しいと答えるくらいしかなくて、それを
返したところで高梨椿子に、

「何それ」

と返されるだけなのだった。

そうは言ったところで僕が高梨椿子にしてあげられることもなく、強いていうなら、柊瑛斗を変えてあげた、というのが、僕が高梨椿子にしてあげたことなのかもしれない。とはいっても僕が柊瑛斗を変えたという意識は全くないし、僕からいわせれば柊瑛斗が勝手に変わっただけである、というのが正しいのかもしれない。

「あなたに任せたのは、間違いだったのかしら」

そんなことを高梨椿子は呟く、それこそ今更すぎること、だったら高梨椿子は最初から計画を間違っていたことになる。

僕にそんなことを言ったって仕方ないのではないか。僕は別に最初から協力した覚えもないし、僕は最初から高梨椿子がヒロインになれるとも思っていなかった。

彼女は計画の一旦として僕に接触したといってもいいのかもしれないが、結局のところ、僕は彼女の力にはなれなかったようだ。けれども高梨椿子は諦めてはいないようだった。

「あら、諦めるにはまだ早いんじゃないの？」

彼女は僕に向かってそんなことを言う。さすがヒロインを目指すものとしての力強い言葉だとは思う。

1回や2回、柊瑛斗にアタックしてもダメだったからといって高梨椿子は諦めるわけではなさそうだった。僕としては非常にそれはそれで頼もしいことではあるし、いいことではあ

るのだけど、その諦めない人間というのはここでは高梨椿子だけのことであり、諦めない人間の中に僕が入っているとは考えたくない。

それでも高梨椿子は僕を巻き込む気が満々のつもりであるようだった。

「さあ、次の計画に移るわよ」

彼女は僕に向かってそんなことを宣言する。

いくらなんでもそこまでは付き合いきれない、僕はそんなことを彼女に告げると彼女からはあつさり、

「あ、そう。ならいいわ」

と返されてしまった。彼女にとって、本当に僕はただの柗瑛斗に接するための、柗瑛斗を変えるための要因というか要員であつたらしく、僕に手伝う気がないとわかるとあつさりと身を引くのだった。ありがたいことだと思っておく。

実のところ、柗瑛斗の高梨椿子への印象はそう悪いものではなく、結構好印象であるらしい。

まあ、高梨椿子も特に柗瑛斗に積極的に接しているというわけでもないし、普通に会った時に普通に接する程度なのだからそれで印象が悪くなる方がよっぽど難しいとは思うのだが。

柊瑛斗からすれば、高梨椿子は本当にただの自分と同じ能力者、というだけの関係だし、その関係が変わるような場面として、高梨椿子のピンチに駆けつけるといようなことも今後あるかもしれないが、経験者である僕としては、柊瑛斗は淡々と高梨椿子を助けるだけになると思う。

高梨椿子は諦めない。柊瑛斗のそばにいろように彼女自身これからも効果的のようなそうでもないような作戦を実行し続ける。とはいっても現状を見る限りではそもそも作戦ともいえないような接触の仕方しかしておらず、僕としてはあの調子のままで高梨椿子は何もできず終わっていくのだらうなと思った。

柊瑛斗はいつもどおり僕の前から消えるし、彼はいつもどおり僕の前に戻ってくる。強くなったらしい柊瑛斗はとりあえず今のところ負ける気配が全然ないらしく、それは彼が得た能力者として物語に登場する登場人物になることができた証なのかもしれない。

それでも僕は、彼が強くなる決心をする前と彼の思いは何も変わってはいない気がする。

fin.